

# 斗南藩基礎講座

## 第8回 藩士の活躍 柴五郎

日時 令和5年11月16日(木)18:30～

場所 下北文化会館大集会室

講師 地域史研究家 三浦 順一郎

## 今回のテーマ

我れ人にかけてし恵は忘れても

ひとの恩をばながく忘るな

新渡戸稲造 『一日一善』より



# 除幕式を伝える新聞記事 2021. 6. 28(月)

第46712号 (第三種郵便物認可) 2021/6/28(月) 東 興

## 少年期の苦難乗り越え陸軍大将

# 柴五郎の功績 後世へ

**むつ**

斗南藩の領地だった現在のむつ市で少年時代を過ごし、後に陸軍大将となった柴五郎（1859～1945年）の功績をたたえる顕彰碑が、同市落野沢の柴家居住地跡に建てられ、27日、除幕式が行われた。

顕彰碑は縦約73センチ、横約160センチで、高さ約100センチの台に載せられている。会津若松市の室井照平市長が揮毫した「柴五郎翁顕彰碑」の文字を石碑に刻んだ。

柴五郎翁顕彰碑建設実行委員会（小町屋祐三委員長）が建設を進めてきた。昨年、旧会津藩士が斗南の地に移住して150年になるのを記念し、除幕式を行う予定だった。

が、新型コロナウイルスの影響で延期していた。小町屋委員長、むつ市の宮下宗一郎市長、斗南會津会の山本源八会長らが除幕し完成を祝った。小町屋委員長はあいさつの中で「柴五郎をたたえる顕彰碑は今までもここにできなかった。ここに建てたことはむつ市の誇りでもある」と話した。また、宮下市長はこの地に歴史の光が当たる瞬間に立ち会つことができうれしい、山本会長は「柴五郎は斗南で受けた恩義を終生忘れなかった。柴の斗南に寄せる思いを今後も大切にしていきたい」と、それぞれ語った。

柴五郎は会津藩士の家に生まれ、斗南の地である現在のむつ市で少年時代を過ごした。寒さと飢えに苦しみながらも不屈の精神で乗り越え、軍人の道に進み、陸軍大将にまで上り詰めた。



顕彰碑の前で記念写真に納まる小町屋委員長（前列中央）ら

## 落野沢地区 居住地跡に顕彰碑

# 柴五郎翁顕彰碑



五郎はどんな人物だったのだろうか。



33歲



42歲



晚年



## 柴家の斗南移住者 壬申調べ(明治5年)

父 佐多蔵(61歳)

長男 太一郎(32歳)後に下北郡長(M19・3~M23・11)

妻 すみ(19歳) 母方の親族の日向新六の妹

三男 五三郎(26歳)

四男 茂四郎(21歳) 後に外務参政官・衆議院議員、政治小説『佳人之奇遇』の作者(東海散士)東京修行

五男 五郎(14歳) 後に陸軍大将

大伯父東亡妻の幾佐(63歳) \* 茂四郎は四郎の幼名

# 柴五郎の人格はどのようにして形成されたのか

柴五郎の人格の形成の要因は、次の5点が挙げられる。

1. 肉親の死に接して命の尊さを知った
2. 親や兄・姉からの家族愛
3. 二本柳(山本長十郎)家、二本柳家、新田家の温もり
4. 上司の梶原平馬、山川浩、野田豁通から訓育された
5. 学問から学んだ



# 1. 肉親の死について見てみよう

(1). 柴家の自刃者

(2). 西郷頼母家の自刃者

(3). 内藤介右衛門信節家の自刃者

# (1). 柴家と木村家の自刃者 (柴家は5男6女)

- 祖母のつね(80歳)自害、○母のふじ(50歳)自害
- 長男の太一郎の妻とく(20歳)自害、○四女のそい(19歳、土屋敬治の妻)自害 \* 土屋敬治は鳥羽・伏見の戦いで戦死
- 六女のさつ(7歳)自害、○次男の謙介 栃木県で戦死(25歳)
- ◇三女のしゅんと五女のいよ 夭折 柴家自害 5名
  - \* 次女のつまは望月新兵衛に嫁ぐ。大正14年に死去。
- 長女のかよ(32歳、木村兵庫の妻)自害、○兵庫の娘すか(8歳)、
- 兵庫の娘えん(6歳)、○兵庫の父幸蔵(68歳)、○母のなみ(59歳)、
- 兵庫の養父忠右衛門(60歳)、○養母のなお(50歳)、
- 兵庫の義妹こと(25歳) 木村兵庫邸で自害 8名

# 柴家の菩提寺 恵倫寺(会津若松市)





# 柴家の墓





# 柴家の墓



父柴由道(佐多蔵)



柴氏家属之墓





柴五郎之墓



柴五郎室中村氏之墓 同室鍋島氏之墓



## (2). 西郷頼母邸での自刃者 21名

妻	千恵子(34歳)	ちえこ	親戚	小森駿馬の祖母	ひで子(77歳)
母	律子(58歳)	りつこ		妻	みわ子(24歳)
妹	眉寿子(26歳)	みすこ		長男	千代吉(5歳)
妹	由布子(23歳)	ゆうこ		長女	つち子(10歳)
長女	細布子(16歳)	たえこ		次女	みつ子(2歳)
次女	瀑布子(13歳)	たきこ		町田伝八	(58歳)
三女	田鶴子(9歳)	たづこ		妻	ふさ子(59歳)
四女	常磐子(4歳)	とわこ		姉	浦路(65歳)
五女	季子(2歳)	すえこ	町田家親戚		
支族	西郷鉄之助(67歳)			浅井信次郎の妻	たつ子(24歳)
	妻	きく子(59歳)		長男	彦(2歳)

# 西郷家の菩提寺の善龍寺の山門





# 二十一人之墓



# 会津藩家老西郷頼母と妻千恵子





# なよ竹の碑

題字 松平保男



秩父宮兩殿下御  
成記念碑の題字  
揮毫者





# 西郷千恵子の辞世の歌

なよたけの風にまかす身ながらも

たわまぬ節はありとこそ聞け」

西郷頼母の妻 西郷千恵子(1835～1868)

細くてしなやかな竹が風の吹くままに身をまかせるように、従順であるべき女ではあるが、いったん事があれば、いたずらにしなって曲がるだけではない強い一節もあるのだ。

### (3). 内藤一族の自刃者 泰雲寺 14名

内藤可隠	介右衛門父	泰雲寺自刃	67歳	
内藤もと	可隠妻	泰雲寺自害	58歳	
内藤ひさ	介右衛門妻	泰雲寺自害	23歳	
内藤 秀	介右衛門娘	泰雲寺死	6歳	
内藤英馬	介右衛門倅	泰雲寺死	3歳	
内藤 柔	介右衛門姪	泰雲寺自害	23歳	
内藤 篤	介右衛門妹	泰雲寺自害	19歳	
内藤津久	介右衛門妹	泰雲寺自害	17歳	
内藤 清	介右衛門伯母	泰雲寺自害		
家臣	古川十兵衛	47歳	安部重次	31歳
	石野八四郎	30歳	元木吉之介	35歳

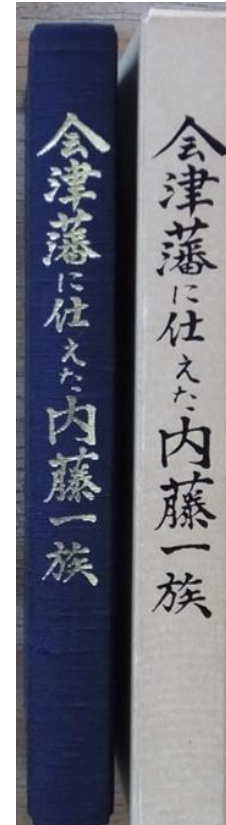
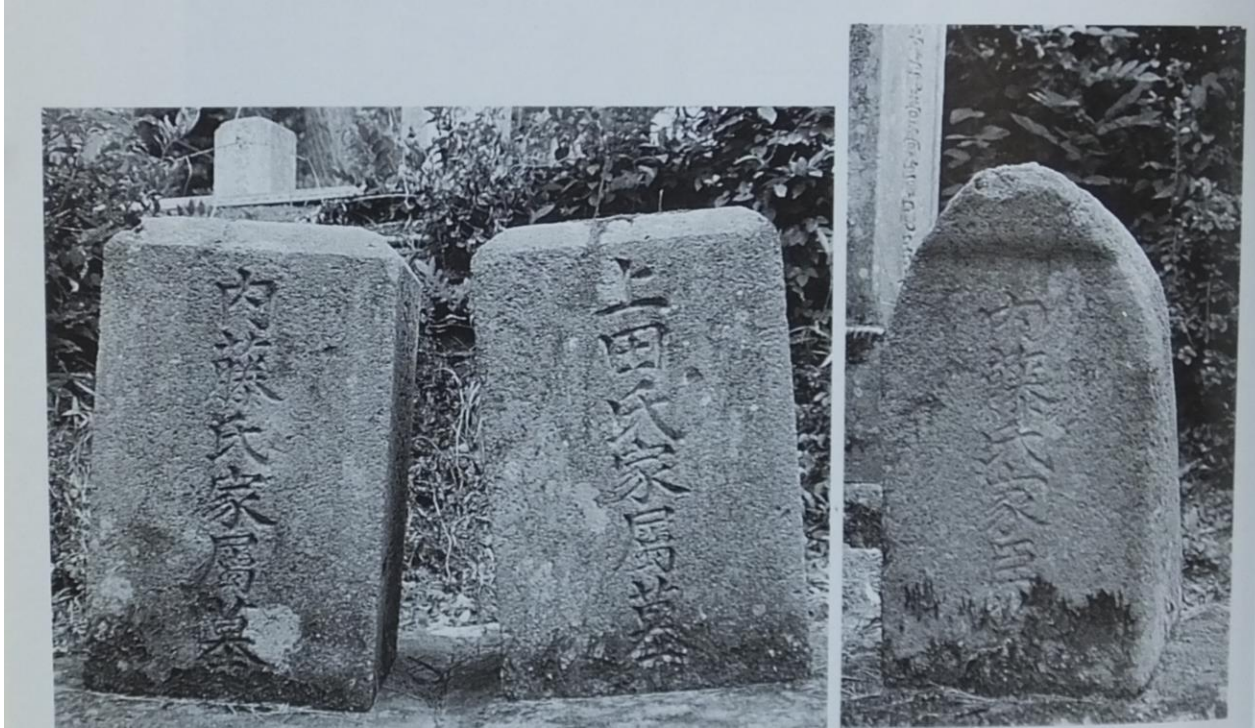
富田喜千六

# 上田家殉難者 5名

上田伊閑	父	泰雲寺自害	61歳
上田しげ子	母	泰雲寺自害	61歳
上田みね子	伯母	泰雲寺自害	56歳
上田じゅん子	妻	泰雲寺自害	30歳
上田ちえ子	長女	泰雲寺自害	9歳

合計 19名

# 内藤氏・上田氏の家属(家族)と家臣の墓



柴五郎は斗南で

どんな生活をおくったのだろう

# 柴五郎一家が暮らしていた場所と刀鍛冶屋

工藤林蔵(助)家跡  
(現田名部タクシー)



二本柳刀鍛冶屋  
(二本柳社会保険事務所)





# 人の温かみ ①住居

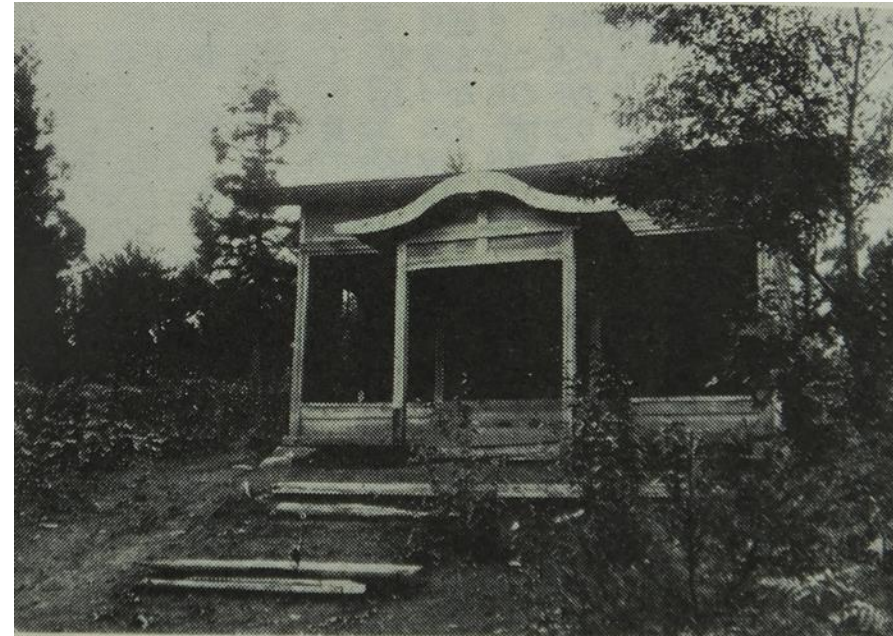
資料P7終～P8初

## A. 田名部迎町の工藤林蔵(助)

あばら屋で障子に貼る紙がなくて、米俵や吠の蓆を結びつけて隙間風を防いだ。囲炉裏でボックスを炊いた。囲炉裏を背にして、前方に少しの夜具や着物をかけて寝た。夏は蚊帳がないため、木挽屑を枕元に燻して寝た。満足な着物を着ていなかった五郎は、寒さを防ぐために向かいの刀鍛冶の二本柳家で暖をとった。

## B. 落野沢 新田初五郎家に間借りする

# 落野沢の新田家と呑香稻荷神社



## ②食べ物 資料 P7の5行～7行 P8の8行～14行

寒冷地の斗南は米が栽培されない。稗・粟・豆が主食であった。藩から支給される玄米三合の御渡し米では十分でなかった。蕨、蒨、アサヅキ、オオバコ、その他木の芽、草の根など、食べられるものは皆食べた。このことは柴家だけでなく困窮した藩士も同様であった。犬の肉も食べたが、食べきれずに閉口したという。

昆布、若布、荒布の海草を砕いて木屑のように粉にして煮る。それに少々の豆と稗を入れて粥にした。それをオシメといった。海藻臭いが、腹を満たすことができた。

後年、五郎は当時の生活を偲んでオシメを食べた。

## ① 五郎の仕事 資料P9 14行～22行

蕨の根を砕き、何回も川の水で濾して澱粉をとった。それを売って塩や豆などを買ってくる。五郎は山桑の葉を背負って田名部の町に出て売り、20文に換えて銭湯に入った。これが楽しみであった。12歳の子どもが生計を助けるために、働かなければならなかった。

五郎には勉強の時間がなかった。心配した兄が、日新館に入学するように働きかけてくれた。男の末っ子として生まれた五郎は、親兄から温かく見守られた。

# 柴五郎にかかわった人たち

山川 浩

梶原平馬

野田豁通(のだひろみち)

# 梶原家と山川家の関係

○内藤信節(兄)

水野 貞 再婚

||—一文雄 シツエ

○梶原平馬(弟)

||—影清

□山川二葉(姉) × 離縁

□山川 浩(弟)

□山川健次郎(弟)

□山川捨松(妹) 後妻

||

大山 巖(元帥)

山川 浩



## その後の梶原平馬

家老の内藤介右衛門信節の弟、梶原家の養子になる。山川浩の姉の二葉と結婚する。24歳で会津藩の首席家老となる。松平容保に従い京都に行く。京都で水野貞と恋に陥り、結婚する。二葉と離婚する。廃藩置県後に青森県庁庶務課長となり、このとき柴五郎の面倒を見る。二ヶ月で辞任するも、その後行方不明となる。

水野貞は明治14年11月に、根室の花咲尋常小学校に勤めるが退職して、明治22年に私塾を建てる(後に私立根室女子小学校と改称)。この年平馬が47歳で死亡する。根室女子小学校は児童数の増加によって、経営困難となった。児童を花咲小学校と弥生小学校に転校させた。明治32年に花咲小学校に再度勤務し、昭和2年2月20日に79歳で死去した。

昭和63年8月15日に、梶原平馬の墓が根室で発見される。



# 長谷川つとむ 『会津藩 最後の首席家老』



野田 豁通 (のだ ひろみち 1844～1913)



熊本藩士。戊辰戦争では奥羽で奮戦した。函館戦争では軍監として、五稜郭攻撃に功をなした。戦後は胆沢県（岩手県北部と宮城県南部の管轄）の少参事、弘前県の大参事（副知事）となった。野田の進言により、県庁が弘前から青森に移転した。野田は青森が政治、経済の中心地になることを見通していた。官選の初代知事（権参事）となった。柴五郎は野田のお陰で青森県庁の給仕をした。

野田は討幕派、佐幕派の差別はなく、人物本位で書生に取り立て、人材を養成した。野田のもとからは、柴五郎（会津藩、陸軍大将）、後藤新平（仙台藩、満鉄総裁・東京市長）、斎藤実（仙台藩、総理大臣・内大臣）、林田亀太郎（熊本藩、衆議院議員）らが輩出した。

後藤新平



斎藤 実



林田亀太郎



手紙から柴五郎の人柄を見てみよう

# 五郎の手紙① 二本柳小太郎宛 大正12年12月3日

お禮遣下実：此奉  
書之文（智佛法）  
之文は自かた、陸上  
印之折日：貴宗之  
工場：常和度以温  
以字信：浴一と高村  
回飲以懐舊之情  
記より去入中実  
必推考支特：旅  
者より来訪上辱  
少：常字信之禮  
感謝之者又貴祖  
父以綴成之鑑 吾等  
以東路之新り是又  
銘肝以之如別後  
早業以禮状之云々  
之文小之味之云々  
彼之大震其之禮以  
尔来混雜：何れ思  
以之太に禮以之段  
以実報之と云々  
此度甚く粗末と云々  
以所之共様是一つ  
別便に送るは  
召名記言及使向以  
本懐：自存の以向  
莫く存切南の自愛  
自折と云々  
大正十二年十二月三日  
二本柳小太郎  
五郎

大正12年12月3日

拝啓、追日寒氣相募候處、愈御清勝可被為在奉賀候、陳者、小生幼少之折、日々貴家之工場に御邪魔致し、温き御厚情に浴し候、當時を回顧致し懐舊之情に驅られ、去八月中突然推参致候處、特に旅宿まで御来訪を辱うし、御厚誼之程、感謝之至、尚又貴祖父御鍛成之鎗壺本御惠贈に預り、是又銘肝仕候拜、別後早速御禮状可送運之處、小生歸京翌々日彼之大震災に遭ひ、尔来混雜に紛れ、思いなから大失禮致候段、御容赦被下度希上候、此度甚だ粗末之品々御座候え共、襟卷一つ別便にて送運致候間、



為紀念御使用被下候ハジ、本懐に奉存候、時下向寒之段、切  
角御自愛奉祈候、拝具

大正十二年十二月三日

柴五郎

二本柳小太郎殿

座下

貴家を御尋致候折の腰折御笑草まで

あたたけきやとなつかしみたつねきて昔の冬をしのふけふかな

五郎の葉書① 二本柳小太郎宛 昭和2年5月23日

此信 貴信 親友 披讀 以 示  
夜之 候 念 以 健 解 子 以 之 際 送  
口 抽 卸 申 之 其 々 可 少 々 差 々 々 々 々 々 々  
以 込 礼 々 々 之 儀 攝 之 推 荷 以 込  
以 更 投 以 申 印 安 結 々 存 々 以 更 表  
之 取 潤 々 感 謝 以 込 々 以 込 申 々 々  
五郎 五郎 五郎  
五郎

昭和2年5月23日

拝啓 貴信難有披讀致候、初夏之候、愈御健祥奉賀候、  
陳ハ過日拙邸内ニ生候筍少々差上候處、御返礼として結  
構之椎茸沢山御恵投被下、却恐縮ニ存候、御厚志之段深  
く感謝致、厚く御礼申上候、拝具

五月二十三日

柴五郎陸軍大将来郡の記事  
「下北新報」 昭和二年九月廿八日

柴大将来郡

柴大將には北海道巡遊の帰途、二十六日来郡して當町金千旅館に一宿し同夜は大湊村長その他舊會藩の士十四五名と卓を圍んで懷舊談を試み翌二十七日は落の澤、斗南ヶ丘等の舊蹟を探ねて當時を願望し田名部小學校に於て一場の講演をなし更に恐山に登りて探勝し同日田名部驛發上り三番列車にて帰京の途に就かれたるが途中野邊地、三澤等にも舊知の諸氏を訪ねられた。

\* 千 金千(かねせん)旅館＝秋濱旅館





昭和2年10月3日

拝啓、秋冷追日御暮し候處、愈御清適御務み奉り故、奉賀候、  
陳者、過日小生貴地に推参致し候砌は、地方在住の舊同郷諸賢多数御集り、迎送成し下され候上、歓迎会御開催、御懇篤なる御待遇を辱うし、感謝の至り、殊に御高話を拝聴し、大いに懐旧の情愛深うし、御なつかしく存じ候、尚又出赴の節、貴地産の結構の御土産頂戴致し、重々の御芳志に対し、厚く御禮申上げ候、殊に貴下には御多用中態々落之澤迄、御出向下され候は、是又深謝に堪えず候、御拝別後、諸々漫遊の後、會津にも立寄り、昨三日無事帰宅仕り、取敢ず御禮状拝送致し候、却説、先日貴下が態々落ノ澤御出向下され候、

御厚意に甘え御免倒 御願ひ致し度く件御座候、**小生往時落ノ澤に  
難儀致し候様子を、見孫に知らしめ、訓戒の資に供さん為、**新田の家  
と吞香稻荷社の写真希望致し候間、甚だ御手数ながら、御地の写真  
師に御希し、彼の家入口あたりの現状うつさせ下され間敷くや御願ひ申  
し上げ候、大きさは手札、若しくは六つ切位にてよろしく、台紙は付けざる方  
よろしく候、右費用の為、差し当り拾円、小為替を以って、此に差し出し候間  
、御迷惑ながら御許諾願ひ奉り候、先は御禮を兼ね更に願用此くの如くに  
御座候、

拝具

十月三日

柴五郎

渥味龍彦殿

侍史

写真の数は四五枚で足り候、

五郎の葉書② 新田巳之吉宛 昭和6年12月21日

悟  
珍うき干わらび澤山(市送)  
下すれぬ深印甜有あすす  
儲て先餓饑見舞のつとりにて  
一封上げすしたるや友書と  
しては又納のぬ返りあり何方様か  
石寺ありものと推し置る入り改め  
書梅の中入々何方の書石寺も何と  
十二月二十日



昭和6年12月21日

復啓

珍らしき干わらび澤山御送下され候深切難有存します  
諸て先日饑饉御見舞のつもりにて一封差上げました  
る處、香奠として御受納の御返事あり何方様か御不  
幸ありしものと推量驚入り改めて御悔ミ申入候  
何方の御不幸ニや伺上候

早々

十二月二十一日



昭和7年1月11日

拝啓

先ず以って目出度く御超歳成され、祝着に存じ上げ候、時下酷寒の砌、老御母堂様始め、皆々御揃い愈御安祥の段、慶賀奉り候、陳ば此度は存じも寄らず、貴地名産に干し鰯沢山御恵贈下され、有り難く受納致し、御芳志の段感謝致し、厚く御禮申し上げます、承れば貴地方は昨年の凶作により、一般に非常の難渋の由、遥に推察致し、往昔小生等は窮迫致し、オシメ、蕨根等に露命をつなぎし事を回顧し、貴地方の人方に対し、同情の至りに堪えず候、過日も落の沢の旧寓の主人に対し、見舞いを寄せ候事に御座候、降って拙者一同無事に消日罷り在り候間、御放念下され度く候、

早々拝

一月十一日

二本柳常五郎殿

机下

柴五郎



# 昭和二年度 校務日誌 田名部尋常高等小学校

昭和二年九月廿七日 火曜 気象 前晴 後晴

## ○訓話要録

- 一、柴大将ノ幼児ニ就テ

## ○雑記事

- 一、午前十時半ヨリ午前十一時マデ柴大将ノ講演アリ

(赤ヶ字図主任)

- 一、午後二時半柴大将ヲ町場マデ迎送り盡リ(ナセリ)

昭和二年九月廿八日 水曜 気象 前晴 後晴

## ○訓話要録

- 一、柴大将ノ講演ニ就テ

# 柴五郎の歌

# 五三郎・太一郎の柱の落書き

さすらひて身をば落の澤すまひ

人情反覆処如此昨昨是開花

今日落下（五三郎）

かりまくら月日もふればさながらに

名残ぞおしきかまふせの山（太一郎）

はらからの昔をここにしのふかな

おとしのさわの水くきのあと（五郎）

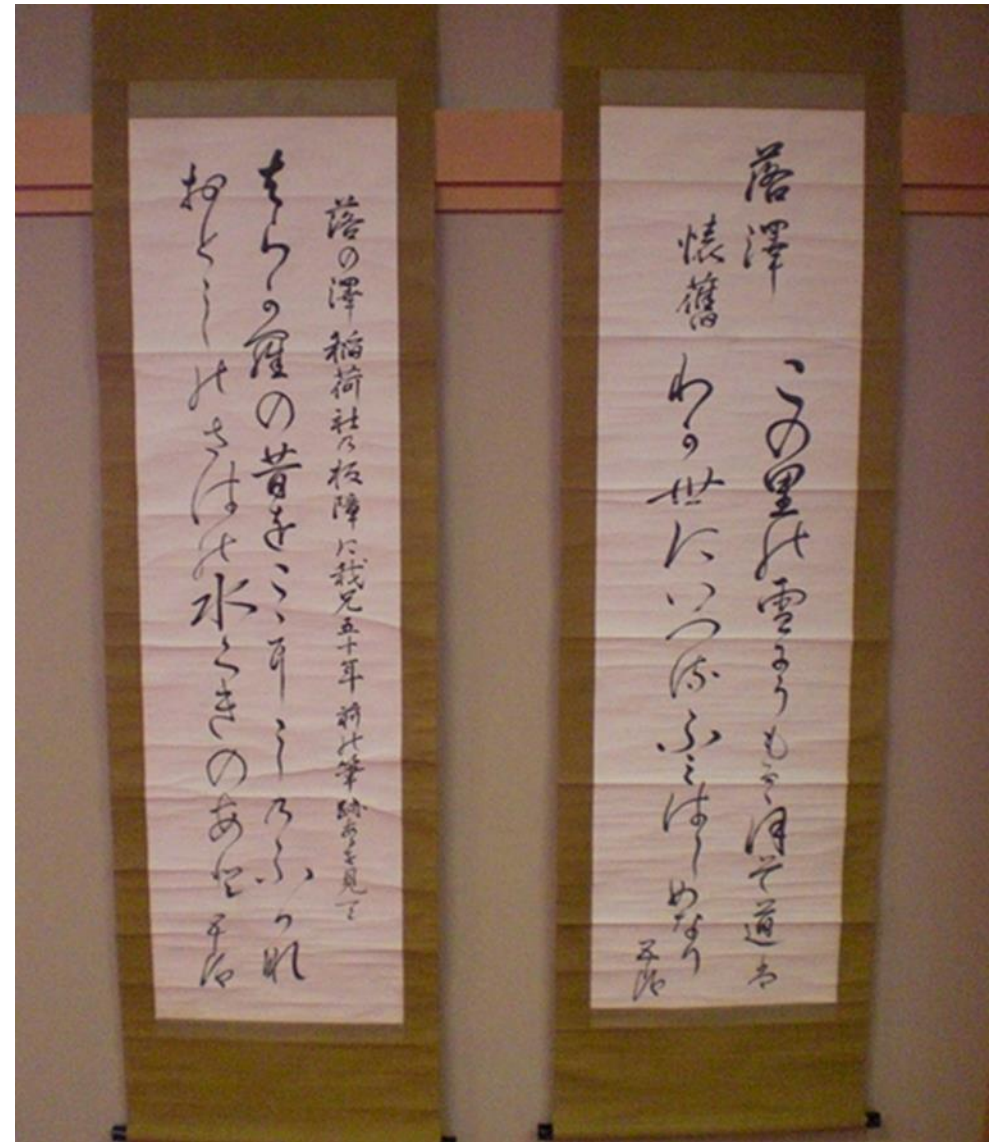


# 五郎の歌①

落の澤稻荷社乃板障に我兄五十年前の筆跡あるを見て  
はらからの昔をここにしのふかな  
おとしのさわの水くきのあと

## 落澤懐舊

この里の雪にうもるるほそみちは  
わが世にいつるふみはじめなり

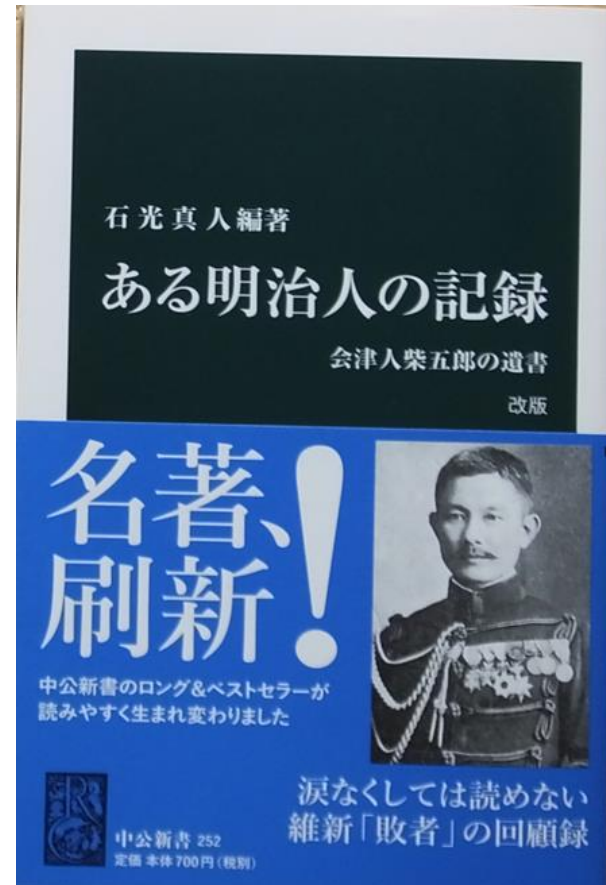


『会津人柴五郎の遺書』 ➡ 『ある明治人の記録』

昭和46年4月号



昭和46年5月25日 初版発行





# 石光真人編著『ある明治人の記録』について

- 『ある明治人の記録』は、柴五郎自筆の『戊辰殉難回顧録』と『柴五郎略歴』を底本として、石光真人が編集したものである。
- 昭和17年(1942年)に、柴五郎が石光真人に編集を頼んだ。30年後の昭和46年4月号の中央公論の「歴史と人物」に「会津人柴五郎の遺書」として発表された。同年5月25日に、中公新書として出版された。
- 『戊辰殉難回顧録』と『柴五郎略歴』に記述されていないことが、『ある明治人の記録』に書かれている。そのため潤色や創作があるとされている。
- 「会津戦争後談」は、柴五郎が昭和4年(1929年)9月15日に、日本工業倶楽部で講話したものである。後に「會津會雜誌」第三十五號に掲載。

# 『ある明治人の記録』の間違い

下北郡が誕生したのは明治11年(1878)である。この場面は明治4年である。下北郡はまだ誕生していなかった。現在の上北郡・下北郡は、江戸時代には北郡(きたのごおり)と呼ばれていた。なかでも下北地方は田名部通と称されていた。

明治11年に郡制を敷いたときに、北郡を上・下の二郡に分割した。東京に近い方を上北郡、遠い方を下北郡にした。

# ①「ここは戦場なるぞ」と父親は言ったのか

「武士の子たることを忘れしか。戦場にありて兵糧なければ、犬猫なりともこれを喰らいて戦うものぞ。ことに今回は賊軍に追われて辺地にきたれるなり。会津の武士ども餓死して果てたるよと、薩長の下郎どもに笑わるるは、のちの世までの恥辱なり。ここは戦場なるぞ、会津の国辱雪ぐまでは戦場なるぞ」と、つねと変わりて語気荒く叱る。

(34版64頁・改版再版74頁)

「やれやれ会津の乞食藩士ども**下北**に餓死して絶えたるよと、薩長の下郎武士どもに笑わるるぞ、生き抜け、生きて残れ、会津の国辱雪ぐまでは生きてあれよ、ここは戦場なるぞ」と父に厳しく叱責され、

犬の肉の味 蕨根の掘り起こし  
資料 P8の最終行 P9 18行～21行

②犬の肉は甘かった

不味くて犬の肉がたべられなかったのではない。最初は甘かったが、中々食いつくせないで閉口した。

③蕨の根をいつ掘り出したのか

冬に蕨の根を掘って、澱粉をとったとある。春先の開墾のときに土を掘り起こすと、蕨根がたくさん出てきた、講演で話している。

## 柴五郎の徳1 北京籠城時の日本軍の指導

明治33年(1900)、柴五郎中佐が北京駐在武官の時(41歳)に、義和団事件が起こる。義和団は扶清滅洋をスローガンにかかげる宗教団体で、日本や欧米の侵略を排除するために蜂起した。彼等は北京にある外国公使館を包囲した。柴中佐は、日本の援軍が来るまで、63日間にわたって北京に籠城し、居留民を保護した。

救援後は、日本の受持ち区域の軍政を担当した。軍紀が厳正で中国人を保護したため、柴中佐の特を慕って他国軍の管区から日本管区に移住する住民が続出した。この柴中佐の指揮が各国に賞賛された。日英同盟締結の陰の功労者になった。



## 柴五郎の徳2 65年ぶりの再会した五郎と光子

昭和12年に、鈴木光子の喜寿の祝宴を目黒の雅叙園で催した。そのとき東京玉川上野毛から柴五郎を招いた。五郎と光子は65年ぶりに再会した。五郎が78歳、光子が76歳であった。柴さんは軍服ではなく平服で出席されていました。そのせいか、柴さんと祖母のふたりは、楽しそうに会話をはずませるお友達というふうに見えていました。

喜寿の祝宴に出席した柴五郎は義理堅い人である。

# 柴五郎の結婚と妻の名前

(元元老議官 中村弘毅の遺児)

中村くまゑ(19歳)———→明治25年死去(21歳)

||.....みつ(長女)明治24年誕生

柴 五 郎(31歳)明治23年初婚

柴 五 郎(40歳)明治32年再婚

||.....春子(次女)

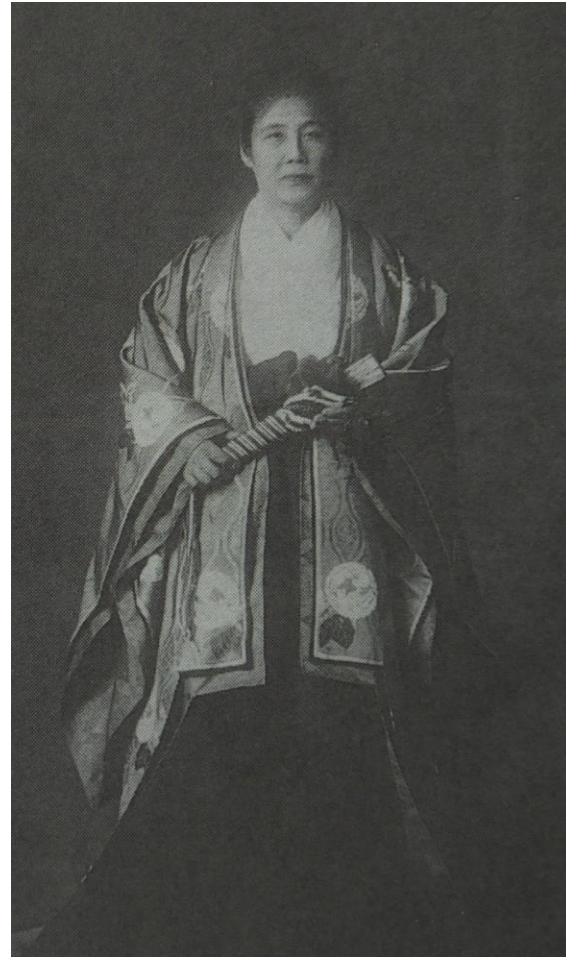
鍋島ミツ(29歳)———→花と改名 昭和5年死去(60歳)

(元佐賀藩主の弟鍋島文武の六女)

# 柴五郎家族



# 妻



# 最初を思い出してみよう

我れ人にかけてし恵は忘れても

ひとの恩をばながく忘るな 稲造



世にいつるかとてをいはふはなむけの

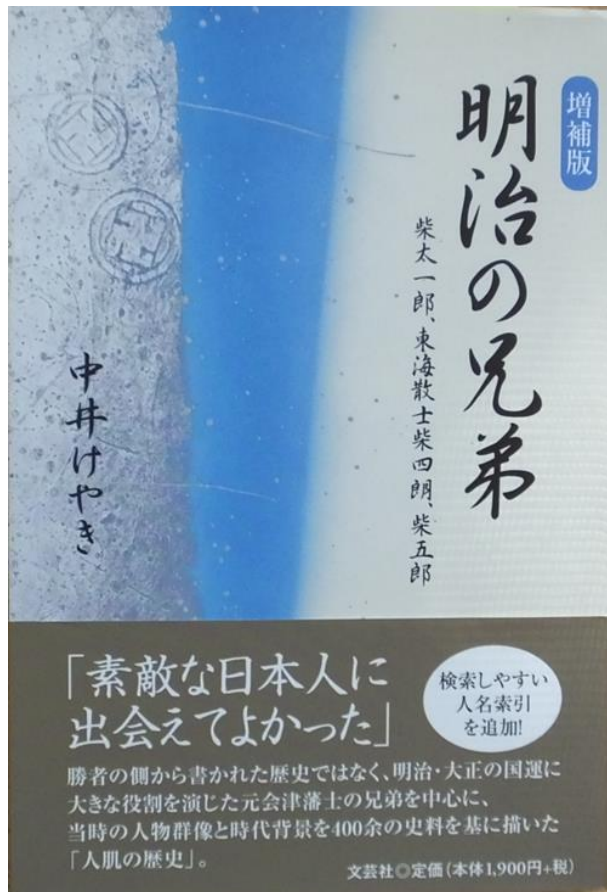
うれしかりしをわれ忘れめや 五郎

柴五郎の伝記・評論や歴史小説

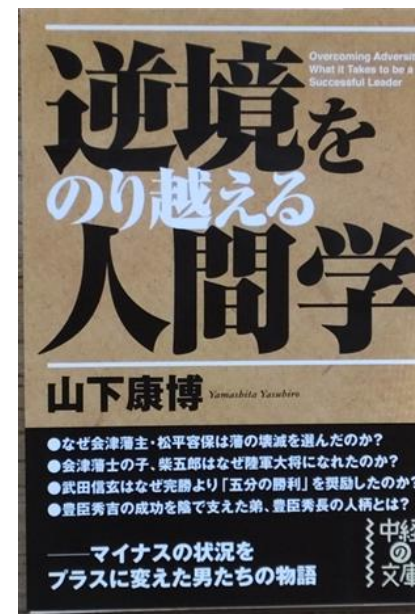


# 柴五郎の伝記・評論

中井けやき



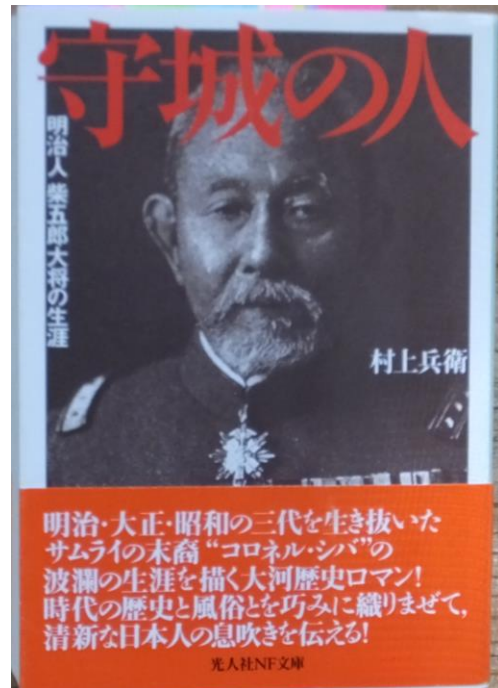
山下康博  
中経文庫



# 柴五郎の物語

村上兵衛『守城の人』

光文社文庫



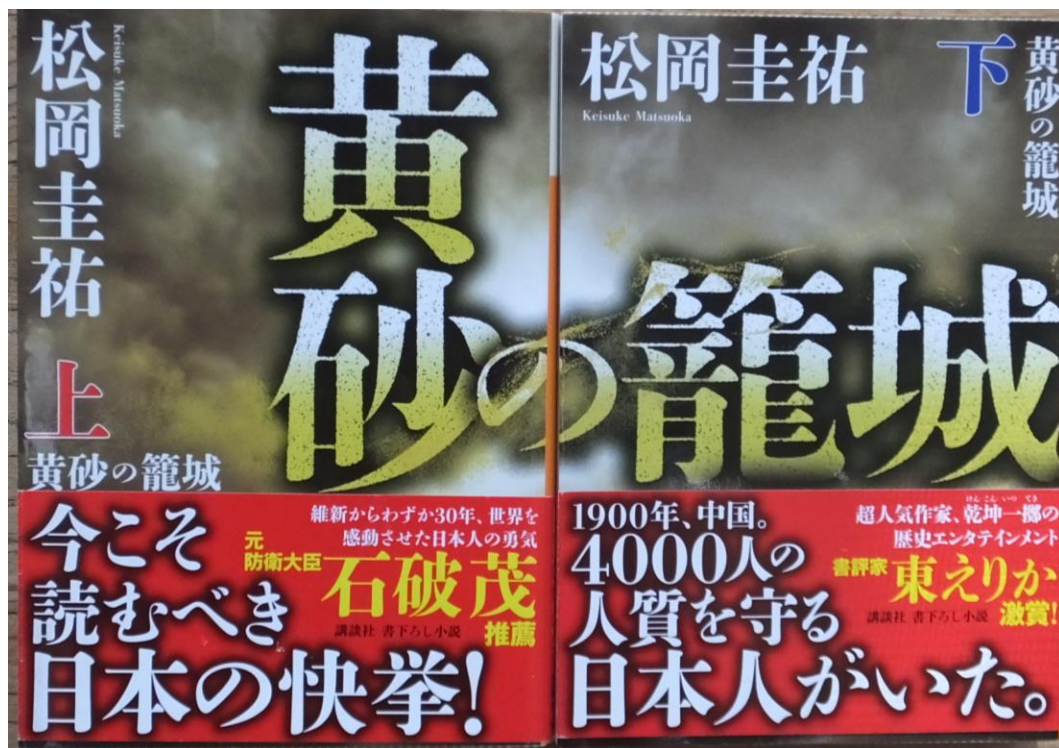
鈴木喜代春 『柴五郎ものがたり』

北 水

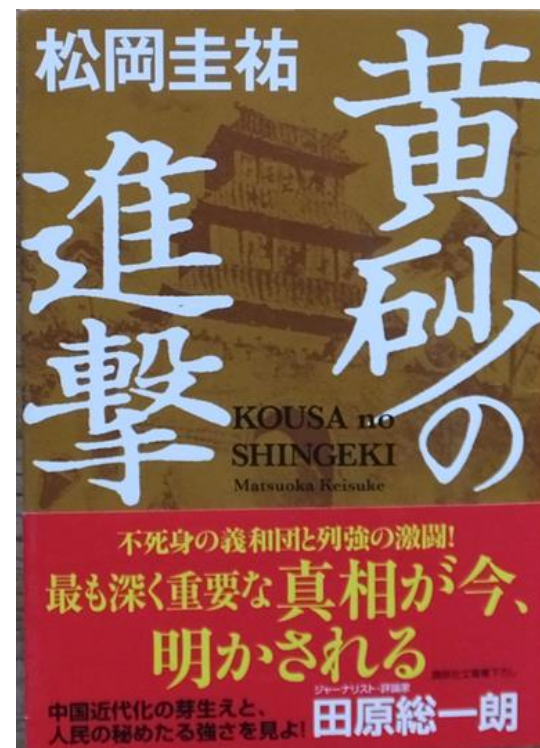


# 柴五郎を扱った歴史小説 松岡圭祐 『黄砂の籠城』・『黄砂の進撃』

講談社文庫



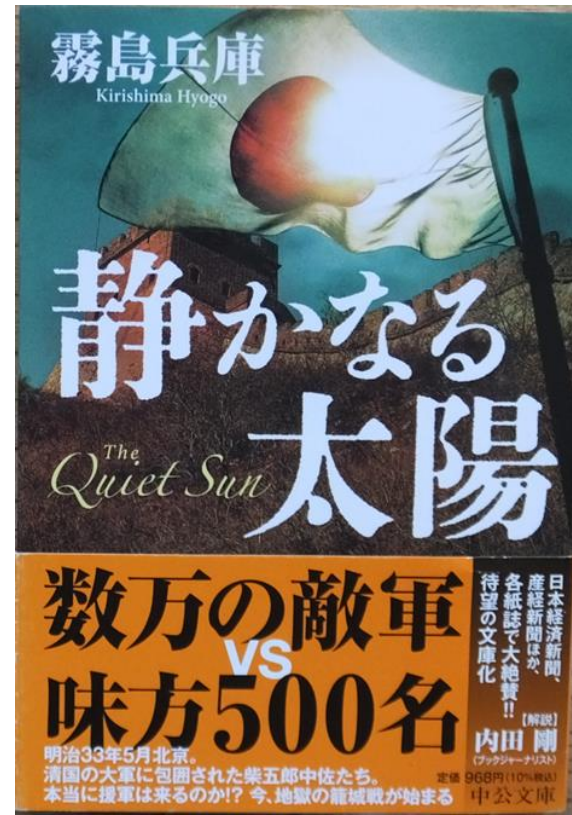
講談社文庫





# 柴五郎を扱った歴史小説 霧島兵庫 『静かなる太陽』

中公文庫







## 『会津若松市史18 会津の人物』 柴四郎・五郎

最後に『ある明治人の記録』について触れておきたい。この著名な本は、ご子孫が保管されている五郎自筆の資料をもとにジャーナリストの石光真人が編集したもので、従来、会津戦争と斗南時代の旧会津藩士たちの苦難を知るうえで重要な資料とされ、高い評価を受けたきた。

ところが、五郎自筆資料と『ある明治人の記録』との間には内容的に相当な食い違いがある。なかでも、石光は、会津が戊辰戦争後に被った不当な処遇を憤った余りであるとは思いますが、会津の敵方であった薩摩や長州を罵倒する言葉を、柴家の人々の言葉として処々に挿入している。

しかし、原資料にはこれらの怨恨の言葉はほとんど皆無と言ってよい。むしろ五郎は、自らが世に出る過程で世話を受けた人々に対する感謝の言葉を繰り返し述べており、原資料と『ある明治人の記録』の読後感は著しく違う。

この本によって会津戦争の悲劇が広く知られるようになった功績は大きかったけれども、同時に、柴五郎の人間像を歪めて伝え、戊辰戦争で敵方だった人々への怨恨を今に至るまで増幅する負の資料の影響もまた大きいということも、我々は認識しておくべきであると思う。

(襲田 健・おそだけん)

# 一つの柴五郎の紹介

# 1. 讀賣新聞 とうほく名作散歩 2023. 9. 30(土)

明治初期、東北平野の中心地として栄えた、津軽の中心地として栄えた津軽市。津軽の中心地として栄えた津軽市。津軽の中心地として栄えた津軽市。

## ● 回想録 ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書 青森県むつ市

柴五郎は、会津藩の士族柴五郎の五男として生まれた。...

柴五郎は、明治維新の激動の中で、...

柴五郎の遺書には、...

## 少年期の辛酸 恩を忘れず

かつては柴五郎が暮らしていた建物 (5月20日)

柴五郎の少年時代は、...

柴五郎の墓所 (5月20日)

### ●●● 柴からの礼状2通 大切に

柴五郎の遺書には、...

○綾瀬はるかより大きな三浦氏の写真 実名を掲載

○論の進め方のうまさ

○斗南の史跡地を紹介し、読む人に斗南を訪れたいという意欲をおこさせる内容



# 柴五郎一家居住跡(落野沢)



# 柴五郎の説明板

戊辰戦争に敗れた会津藩は、明治二年に斗南藩として再興された。翌三年から一万七千四百人余が斗南に移住した。柴家は落野沢の新田家に間借りして、荒地を開墾した。十二歳の柴五郎は桑の葉を摘んで売り、蕨根から澱粉を採取して家計を助けた。開墾地からの収穫はなく、柴家や他の藩士は困窮生活をしいられた。柴家は常食の稗飯さえ満足に食べられなかった。五郎はこの地で強さを培った。

五郎は青森県庁の給仕を務めたが、向学のため東京に出た。陸軍幼年学校・陸軍士官学校に進み、不撓不屈の精神で福島県初の陸軍大将までのぼりつめた。肉親の死に直面して人命の尊さを知り、親・兄弟、上司から温かい訓育を受けた。

このことが五郎の人間形成に影響を及ぼした。清朝の義和団事の際に、柴中佐は居留民保護に尽力した。柴に指揮された日本軍の行動は統率がとれ、柴は各国から賞賛された。日英同盟締結の陰の功労者になった。五郎は斗南の人達から受けた恩義を終生忘れなかった。退役後に二度も田名部の地を訪れた。

世にいつるかどでをいわうはなむけのうれしかりしをわれ忘れめや  
あたたけき宿なつかしみたづね来て昔の冬をしのぶ今日かな

五郎

斗南移住百五十年に際して、柴五郎の事績を顕彰するために落  
野沢の地に碑を建てる。

令和三年六月 吉日

柴五郎翁顕彰碑建設委員会

## おわりに

1. 柴五郎の斗南の生活は1年そこそこであった。斗南の人々の支援・援助が、柴五郎の人間形成に影響を与えたことは過言でない。
2. 人格の優れた上司に指導されたことも要因としてあげられる。
3. 柴五郎の人間性と行動から学ぶことが多い。  
柴五郎は喧伝(けんでん)に値する人物である。





蛇足・余談 もう一つの柴五郎の紹介

柴五郎の事績から学ばなかった例

## 藤原正彦の「私の代表的日本人 柴五郎」から (原文の通り)

翌朝、むつ市役所に向かった。前もって連絡をしておいたので、**下北の地域史に詳しいM氏**が待っていてくれた。(赤字は三浦が脚色)

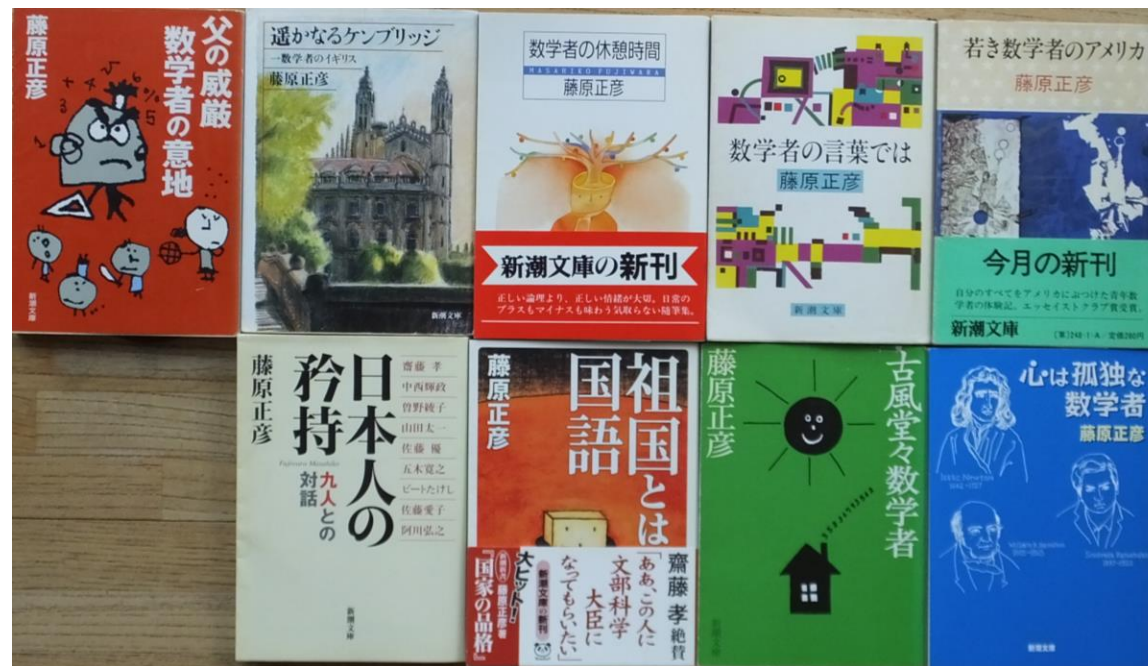
私が自己紹介をすると、「本物の藤原正彦さんですか」と言った。想像していたよりずっと若々しく好感度の高い紳士だったからであろう。

**\* 以後、三浦順一郎の名前は出てこない。**

# 藤原正彦が斗南を訪れる 2023. 7. 3



# 藤原正彦著 『管見妄語』と新潮文庫



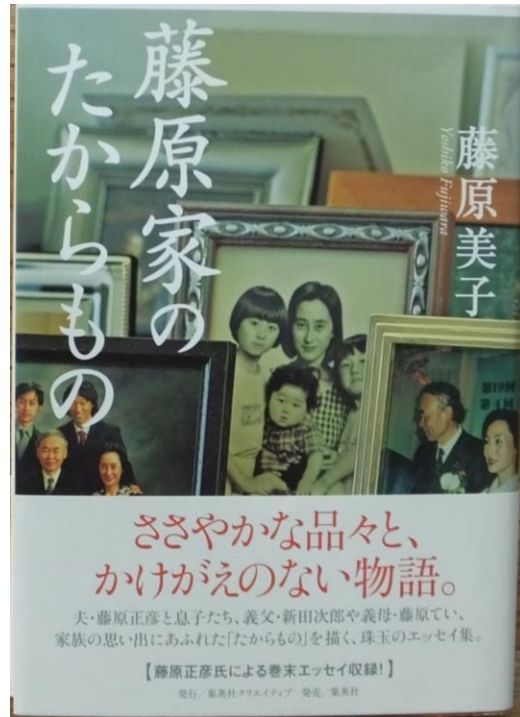


# 藤原正彦の新潮新書と文春新書





# 藤原美子の本



# 贈ってきた本



# 文藝春秋 10月号

## 藤原正彦の 私の代表的日本人 柴五郎



# 下北の地域史に詳しいM氏に対する諸士の反応

- 反応がなかった人
- 「あはは」と笑った人
- 「実名を出すと、その人に批判や質問が行くからか」
- 失礼である(昼飯くらい御馳走するべきである)
- フルネームで書けば寄せ集めの文章にヒビが入ってしまうのではないか。

# 柴五郎から学ぶこと

- 簡単な礼状を出す（ハガキでよい、字の上手下手は問わない）
- 電話で用事をすませてもよい

上のうちの一つでよいから実行してみてもよい



## 五郎のうた②

懐舊(かいきゅう)  
世にいつるかとてを祝ふ  
はなむけのうれしかりしを  
われ忘れめや 五郎

五十年のむかし田名部の  
里にありて  
したしかりける友そこひしき  
五郎

